

聖書:列王記第二12章1～16節

説教:主の宮を修理する

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ってから今日の箇所を見ていきます。今からおよそ二千八百年前、エフーという人物が北王国イスラエルの王族全員と、南王国ユダの王であったアハズヤを倒します。自分の一族と息子を失ったアタルヤは、エフーに対して怒りの炎を燃やし、エフーの信仰を打ち砕くために恐ろしい計画を立てます。アタルヤの夫であったヨラムはダビデの血筋を引いています。アハズヤが倒れた今、この血筋を受け継ぐ資格があるのは孫たちしかいません。主はかつてダビデに対し、あなたの子孫から救い主が現れると約束したことをエフーは堅く信じている。ここで孫たちを全員殺せば、エフーの信仰をズタズタに打ち砕くことができる。そう考えてすぐに実行しようとした。ところがそのとき、祭司エホヤダ夫妻が当時まだ一歳だったヨアシュを助け出し、主の宮にかくまい育てる。それから六年経ち、祭司エホヤダは主の宮の前にヨアシュを立たせ、彼がユダ王国の新しい王となると宣言し、アタルヤは処刑された。それが前回までのあらすじです。今日のところは、主の宮の修理の話が続くのですが、ここにも神の恵みがあります。そのことをご一緒に考えてまいります。

1 アタルヤの時代

1) バアル礼拝

そこでまず少し時間を巻き戻してアタルヤの時代、どんなことが行われていたのかを見ておきます。アタルヤの母親は北王国の女王であったイゼベルで、バアルを熱心に礼拝していました。アタルヤもその影響を強く受けらしく、ユダの女王となるとバアル神殿を建て国教としてバアル礼拝を国民に強制していきます。

そもそもバアルとはどんな神なのか。なじみがなくてわかりにくいかもしれません。実は日本の神社や仏教とよく似ている。私が生まれた村には小高い山の上に神社があって、そこには五穀豊穡の神が祭られていました。そういう神社や祠がそこらじゅうにある。そういう村でした。バアルも五穀豊穡の神で、おまけに祖先崇拝も行っていたそうですからよく似ている。一般の方から言わせれば、「バアルを礼拝して何が悪いのか」と思うかもしれません。でもバアルを拝んでいたアタルヤ

が、エフーに復讐する一心から孫を惨殺した。そこを考えるべきでしょう。

2) 略奪と荒廃

ではそのとき主の神殿はどうなっていたか。第二歴代誌によれば、かつて神殿には金でつくられた祭壇や道具が沢山置かれていたのですが、それらすべてがバアルの神殿に持っていかれ、荒れ放題になってしまいます。アタルヤの締めつけもあって、主の宮で礼拝する者も途絶えてしまいました。

2 神殿修理

1) 祭司とレビ人の手でやらせようとしたが

信仰者であったヨアシュは荒れ果ててしまった神殿を見て、このように命じます。4, 5節。「主の宮に献げられる、聖別された金のすべて、すなわち、それぞれに割り当てを課せられた金や、自発的に主の宮に献げられる金のすべては、祭司たちが、それぞれ自分の担当する者から受け取りなさい。神殿のどこかが破損していれば、その破損の修繕にそれを充てなければならない。」

並行箇所である歴代誌第二にはもう少し具体的に書かれていて、ヨアシュは祭司とレビ人たちに急いで修理するよう命じたけれど、彼らは急がなかったと書いてあります。別に祭司たちが怠けていたということではないと思います。こうなった理由は二つ考えられます。一つ目。詳しくは分かりませんが、当時、祭司たちは自分の担当する者から献金を受け取るようなシステムになっていた。ところがその献金は使い道ごとに、きちんと分けられているわけではなく、全部一緒になっている。そうするとどうしても祭司たちの必要が優先されますから、神殿の修理のため取り分けることが難しかったのかもしれない。二つ目。これはもっと単純で、おそらく修繕の費用に間に合うほどお金が集まらなかったということだったのでしょう。

2) 献金箱をつくって置いた

それでどうしたか。9節。「祭司エホヤダは、一つの箱を取り、そのふたに穴を開け、それを祭壇のわき、主の宮の入り口の右側に置いた。こうして、入り口を守る祭司たちは、主の宮に納められる金をみな、そこに入れた。」

ただ献金箱を置いていただけではありません。歴代誌第二24章9,10節にこうあります。「彼らは、神のしもべモーセが荒野でイスラエルに定めた税金を主のもとに持って来るように、ユダとエルサレムに布告した。すべての首長たちとすべての民は喜んでそれを持って来て、あふれるまで箱に投げ入れた。」

それでやっと主の神殿の修理がどんどん進んでいった。しかし不思議です。祭司とレビ人たちに神殿修理をさせようとしたらうまくいかなかったのに、献金箱を置いて、モーセが定めた税金を主のもとに持ってくるようにと布告したら、民たちが喜んで持って来る。いったいどんな違いがそこにあるのか。

3) 出エジプト記

そこでまずそもそもモーセの命令とはどういうものであったかを確認します。出エジプト記30章12節にこうあります。「あなたがイスラエルの子らの登録のためにその頭数を調べるとき、各人はその登録にあたり、自分のたましいの償い金を主に納めなければならない。これは、彼らの登録にあたり、彼らにわざわいが起こらないようにするためである。」

後にイエスの時代になると、これは神殿税と呼ばれるようになり、イエスがそのことについて説明しております。そのことはまた後で触れることにします。

先ほど見たように、バアル礼拝が盛んに行われるようになると、人々の足は次第に主の神殿からは遠ざかります。モーセの律法のこと忘れ去られ、主を信じる信仰はじょじょに弱くなっていきました。

4) 信仰によって

一般の公共事業は上の者が命令すれば前に進みます。しかし、神殿のことにってはまったく異なる。人々のうちに信仰がなければ、たとえ王が命令しようとも前に進みません。そのことに気がついたヨアシュは、発想を改めて、まず信仰を取り戻させるところから始めてみた。そうしたら人々は喜んで献げるようになり、せき止められていたよどんでいた水どンドン流れるよう神殿が修復されていったというのです。

5) 忠実に働いた

人々がどれほど喜んで主に献げたのか。そのことは次の一節によく表れています。15節。「ま

た、工事する者に支払うように金を渡した人々が精算を求められることはなかった。彼らが忠実に働いていたからである。」

会社で会計を任されている人が帳簿をごまかして横領したとか、業者から裏金をもらって相手に便宜を図る。そういうニュースをしばしば聞きます。ヨアシュの時代もちろんそういうトラブルがあったでしょうから、今と同じように会計監査が行われていた。ところが、この神殿修復事業に関していえば、お金にまつわるトラブルがまったく起きなかったというのです。人々はお金に対しても忠実に働いた。聖書にこう記すくらいですから、これは当時の人たちも驚くようなことだったようです。

3 イエス・キリストのからだ

1) なぜ人々は喜んで献げるのか

ここにいくつか疑問が湧いてきます。モーセの律法の定めとは言え、お上から「献金をしなさい」と命令されたら、普通はいいややながら、しぶしぶ出すものです。ところが、皆喜んで献げたばかりでなく、奉仕する人たちは一生懸命働き、お金も忠実に管理した。それはどうしてだったのかと考えます。

ヒントはモーセの律法にあります。そのところをもう一度読みます。「自分のたましいの償い金を主に納めなければならない。これは、彼らの登録にあたり、彼らにわざわいが起こらないようにするためである。」

神殿税を納めるのは、自分のたましいの償いのため、もしその償い金をおさめなければ、わざわいが起こる。こう言うと、かつてのカトリック教会が出した贖宥状、免罪符を思い出してしまいます。このお札を買えば、あなたの罪は赦され、天国には入れる。そういう触れ込みで免罪符を売った。そうやって会堂を建て教会の会計に充てたとされます。もちろんとんでもない話で、ルターが猛烈に抗議して宗教改革のきっかけにもなったわけです。

2) イエスの教え

モーセが言っていることはもちろんそういうことではない。イエスがこのことについて教えておられます。神殿の管理人が弟子たちのところにやって来て、「あなたがたは神殿税をおさめないのか」と質問した時、イエスは「神の子とされた者たちにはその義務はないのです」とお答えになってからペテロにこのように命じます。マタイの福音書17章27節。「しかし、あの人たちをつまずかせな

いために、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」

それでペテロが言われたとおりにすると、魚の口に銀貨一枚が入っていたので、それを神殿税としておさめた。これは何を教えているのか。まず大前提は、モーセの律法が廃止されたのではない。律法は有効です。でもイエスは、払わなくてよいと言われたではないか。それはどうしてか。誰かが代わりに支払ってくださったからです。だから払わなくてよいのです。では、だれが支払ったのか。イエスです。罪によるわざわいから逃れるために、私たちは本来償い金を払わなければならない。ところがその償い金を主が代わって支払ってくださった。そこだけ聞けば、「ああよかった。もうかった」と言うかもしれない。しかし、そもそも神殿税がなぜ設けられたのか。そこを考えたらそんなのんきなことではないと気がつく。「イスラエルの子らの登録のためにその頭数を調べるとき、各人はその登録にあたり」とある。神殿税を払うということは、私たちは神殿に登録されるということです。神殿としっかりと結びつくということです。ではその神殿はどこにあるのか。イエス・キリストのからだです。十字架でさかれたキリストのからだ。そのからだに私たちが登録され、私たちは神の子とされていた。そう考えたら、どう感じますか。

3) 喜びが湧き出る

ヨアシュの時代から数えれば、イエスが来られるのは八百年先のこと。それでも人々は信じた。ダビデに語られた救い主は約束のとおり必ず来てくださる。まだ見ていない救い主を信じた時、人々は喜んで献げていきました。

私たちもおなじです。すでに二千年前に救い主が来られましたが、私たちは再び来られる救い主を待ち望んでいます。それで私たちは今日も教会に集い主を礼拝する。それも心の中から喜びながら集うことができる。こんなこと世の中にあるでしょうか。少しはあるかもしれない。しかしやがて消えていきます。そしてまた心を満たすものを捜してああでもないこうでもないで平安がありません。

しかしイエスは言うのです。この世の中の目に見えるもだけを見て探すのではなく、目に見えないけれど確かにあるということ信じなさい。目に見えないというと、幻とかありもしないものと思うかもしれない。そうではない。今生きて働いて

いる神がここにおられる。その方は私と一緒に歩んでくださる。目に見えないのにどうして分かるのか。心のうちに平安があるから。世では絶対に与えられない、心を満たす平安を与えてくださる主を信じながら歩んでまいります。